

修士論文
2012年1月

大学生の友人関係に関する研究

— 自我状態, および対人ストレスイベントとの関係について —

指導 中村延江教授
心理学研究科
臨床心理学専攻
210J4014
米川幹彦

目次

I.問題と目的	1
II.方法	1
III.結果	1
IV.考察	2
引用文献	

I.問題と目的

近年、特に 1980 年代頃から大学生の友人関係が希薄化してきていることが指摘されている。千石（1991）は現代の大学生は内面的な友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけあわないように表面的な関係を志向する傾向にあると指摘している。また、友人関係の希薄化は自我同一性の拡散に繋がることが指摘されており（岡田,1995），“ふれあい恐怖”につながり、社会的な不適応に陥る可能性があることが指摘している研究もある（山田,1989）。このことから、希薄な友人関係の特徴について知見を深めることは、大学生の不適応を未然に防ぐことに繋がることが予想される。岡田（1999）は現代の大学生の希薄な友人関係について、現代的友人関係尺度を作成し、自己閉鎖、傷つき回避、傷つけ回避、快活的関係 4 つの群があることが指摘しており、各群によって性格的な特性が異なっていることを指摘している。しかし、これまでの研究において現代的友人関係と性格特性との関連について取り上げているものは少ない。そこで、本研究では大学生の希薄な 4 つの友人関係について、性格的な要因を交流分析理論における自我状態との関連から検討していくことにする。また、4 つの希薄な友人関係によって、人との関係の中で体験される葛藤やストレスも異なっていることが予想される。そこで、本研究では現代的友人関係と対人ストレスイベント尺度との関連についても調査し、多面的な視点から現代大学生の希薄な友人関係の特徴について検討していくことにする。

II.方法

調査は 2011 年 6 月～7 月に実施された。調査対象者は私立大学に通う大学生 261 名で、有効回答数は 205 名（男性 49 名、女性 156 名）、平均年齢 20.0 歳（SD=1.09）であった。調査票は自我状態を測定するために東大式エゴグラム II（TEG - II）、希薄な友人関係のパターンを測定するために現代的友人関係尺度（岡田,1999）、日常生活の中で体験される対人ストレスイベントを測定するために、対人ストレスイベント尺度（橋本,1997）を使用し各尺度間の関連を検討した。

III.結果

得られたデータより、自我状態と現代的友人関係尺度との関連を明らかにすべく、相関分析をおこなったところ CP は傷つけ回避の関係、快活的関係との間に正の相関がみられた。NP は現代的友人的関係、傷つけ回避の関係、快活的関係と正の相関が見られた。FC は傷つけ回避の関係、快活的関係と正の相関がみられた。AC では現代的友人関係、傷つき回避の関係と正の相関がみられた。次に自我状態のエネルギーがどのように機能しているかについて検討するため、重回帰分析をおこなったところ、現代的友人関係の合計得点には、NP、FC が正の影響を持っていることが示された。下位尺度ごとにみると、傷つき回避の関係では NP、AC が正の影響力、傷つけ回避の関係では CP、NP、AC が正の影響力、快活的関係では NP、FC が正の影響力を持っていることが示された。

また、希薄な友人関係と対人ストレスイベントとの関係について明らかにすべく、相関分析をおこなったところ、現代的友人関係は対人ストレスイベント、対人劣等、対人摩擦との間に正の相関が見られた。自己閉鎖の関係は対人劣等との間に正の相関が見られた。傷つき回避の関係は対人

ストレスイベント、対人劣等、対人摩耗との間に正の相関が見られた。快活的関係は対人葛藤との間に正の相関が見られた。

次に、対人ストレスイベントに現代的友人関係がどのように関係しているのか明らかにするために、重回帰分析をおこなったところ、対人ストレスイベントの合計得点には傷つけ回避の関係が正の影響力を持っていることがわかった。下位尺度ごとにみていくと、対人葛藤は傷つき回避、快活的关系が正の影響力を、対人劣等には傷つき回避が正の影響力を、対人摩耗には傷つき回避が正の影響力を持っていることが示された。

IV. 考察

大学生の希薄な友人関係のパターンと自我状態の関係について、各友人関係のパターンに強い影響力を持っていた自我状態について、友人から自分が否定されないように気を使う傷つき回避の関係には従順だが、反抗心を含む AC のエネルギー、友人を不快にさせないように気を使う傷つけ回避の関係には、相手への気遣いや思いやりを特徴とする NP のエネルギー、楽しく、円滑だが表面的な快活的关系には、自由な感情の表現や明るい振る舞いを特徴とする FC がそれぞれ深く関係していることが示された。

また、各対人ストレスイベントと現代的友人関係では、人との関係の中で生じる葛藤や社会的な行動からの逸脱を特徴とする対人葛藤には楽しく、円滑だが表面的な快活的关系が、社会的スキルなどの欠如によって触発される劣等感を特徴とする対人劣等には友人から自分が否定されないように気を使う傷つき回避の関係が、対人関係を円滑に進めようとすることによる疲労を特徴とする対人摩耗には傷つき回避がそれぞれ深く関係していることがわかった。

結果から、大学生の希薄な友人関係パターンには特有の自我状態が関連していること、そして、大学生の希薄な友人関係のパターンによって体験される対人ストレスイベントは異なることが明らかとなった。

引用文献

- ・橋本剛(1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究 13, 64-75.
- ・橋本剛(2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究 48, 94-102.
- ・菱田陽子(2007). 自我状態が友だちつき合いに及ぼす影響:女子青年を対象として 北陸学院短期大学紀要 39, 175-187.
- ・Ian Stewart and Vann Joines (1987). TATODAY (深沢道子訳) 実務教育出版
- ・金子俊子(1995). 青年期における他者との関係のしかたと自我同一性 発達心理学研究 6, 41-47.
- ・松永真由美・岩元澄子(2008). 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究 7, 77-86.
- ・松下姫歌・吉田美悠紀(2007). 現代青年の友人関係における希薄さの質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要 3, 56, 161-169.
- ・松下姫歌・吉田愛(2009). 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究 9, 207-216.
- ・宮下一博・渡辺朝子(1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要 40, 1, 107-112.
- ・岡田努(1988). 学生相談から見た現代青年の特徴 文教大学保健センター年報 8, 24-26.
- ・岡田努(1993). 岡田 努(1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究 4, 162-170.
- ・岡田努(1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究 43, 354-363.
- ・岡田努(1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究 47, 432-439.
- ・岡田努(2002b). 友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究 金沢大学文学部論集行動科学・哲学篇 22, 1-38.
- ・岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究 2, 135-148.
- ・千石保(1991). “まじめ”の崩壊:平成日本の若者たち サイマル出版会 2,
- ・東京大学医学部心療内科TEG研究会(2006). 新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン 金子書房 1,2,3 3-139.
- ・山田和夫(1989). 境界例の周辺:サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法 15, 350-360.